



Special Interview

今月のGAIA Clubでは、「一般社団法人日本プロ野球選手会」森忠仁事務局長のインタビューをお届けいたします。なぜGAIAで野球？と思われる方が多いと思いますが、実は創業間もない2008年から中桐が「日本プロ野球選手会」の共済資金運用についてのアドバイスをさせていただいており、お付き合いは17年にわたります。

昨年は、「日本プロ野球選手会」が立ち上げた「ファントモプロジェクト」にGAIAも協賛をさせていただきましたので、球団の垣根を超えた「日本プロ野球選手会」および「ファントモプロジェクト」について、中桐がインタビューいたしました。ぜひお楽しみいただければ幸いです。

森 忠仁（もり ただひと）一般社団法人日本プロ野球選手会事務局長

1962年生まれ。千葉県千葉市出身。1981年に千葉商業高校から阪神タイガースへドラフト外投手として入団。外野手に転向し同球団で6年間プレーし、1986年に現役を引退。その後、証券会社、保険会社での勤務経験を経て、2000年より日本プロ野球選手会へ転職。2015年に同会事務局長に就任。



まず最初に、「一般社団法人日本プロ野球選手会」の成り立ちや目的、活動内容などについてご紹介いただけますか？

プロ野球選手会には、「一般社団法人日本プロ野球選手会」と「労働組合日本プロ野球選手会」という二つの組織があります。元々は1980年に社団法人として設立されましたが、成り立ちは、退団共済制度といって、選手が毎月の給料から一定額を天引きして積み立て、それを退団時に利息をつけて返すという制度から始まったという経緯があります。一般の会社という財形貯蓄のような制度ですね。

その後、野球教室などの普及活動も社団法人側で始めていきましたが、実はそれより以前にも、任意団体として

選手たちが自主的に集まり、ファンへの恩返しや社会貢献活動を行っていた記録もあります。今の形になったのは、1980年の社団法人が出発点で、その5年後、東京都に労働組合として正式に認可されました。一般企業の労働組合と同様、選手たちの待遇改善や野球界の制度について球団側と交渉する役割を担っています。

戦後すぐは、八百長から選手を守る目的があったというような話も聞いたことがあります。

選手会と言えば、2004年のプロ野球再編問題からのストライキが思い起こされますが、何が問題でストライキにまで至ったのでしょうか？

球団再編が、球団オーナーの理論だけで議論され、選手のキャリアや生活に深刻な影響を与えること、そして何よりファンの意見が十分に反映されていないことが問題でした。球団オーナーは、球団が減ればそのファンが

自分の球団に来るだろうというような考えだったんですね。そうした選手やファン不在の理論を通そうとしたことが、ストライキ決行という結果に繋がりました。

2004年プロ野球再編問題とは？

2004年に大阪近鉄バファローズとオリックス・ブルーウェーブが経営難を理由に合併を発表、両球団は「合併によって経営の合理化・効率化を図る」と説明しましたが、そうすると12球団が11球団になるため、読売ジャイアンツの当時のオーナーである渡邊恒雄氏を始めとした一部球団オーナーにより、球団数を大幅に削減した8～10球団での1リーグ制への移行も視野にいった動きが起きました。

これに対し、当時の日本プロ野球選手会・古田敦也選手会長が中心となり、「合併反対」「2リーグ12球団維持」を求め、2日間にわたって日本プロ野球史上初のストライキを決行、最終的には近鉄がオリックスに合併される形で消滅し、東北楽天ゴールデンイーグルスが新規参入し、2リーグ制と12球団が維持されました。

ストライキが日本で行われたことに驚いた方も多かったと思います。

選手会がストライキに踏み切ることができたのは、ひとえにファンの後押しがあったことがとても大きかったんです。アメリカのメジャーリーグ選手会だと、資金力もあり自分達の権利主張で1年近くストライキしたりしますが、日本では資金の問題も考えると2日間が限界でした。

ですが、自分達の権利ではなく、球界全体のことを考えてのストライキでしたのでファンもついてきてくれたのだと思います。これで一気に議論の風向きが変わり、結果として「12球団」と「セ・パの2リーグ」が維持されることになりました。

あれから20年が経ちます。その後、プロ野球界は変わったでしょうか？

この球界再編問題が契機となり、今ではセ・パ交流戦も2005年シーズンからスタートしましたし、2006年には第1回WBCが開催され日本が初代王者にもなりました。

20年経った今、昨年も観客動員数は過去最高を記録したんですよ。かつて赤字だったパ・リーグも、今ではほとんどの球団が黒字化しているのではないのでしょうか。

ほとんどの球団で黒字化はすごいですね。その理由はどのように考えていますか？

2004年問題をきっかけに、大きな構造の変化が起きたことが、今の結果に繋がっていると思います。ビジネスとして、各球団が努力するようになったんですね。2005年から楽天とソフトバンクが新たに加わったことで、球団経営の

意識も大きく変わりました。特にソフトバンクは、マーケティングやデジタル分野に力を入れている印象ですし、パ・リーグ6球団が合同でマーケティング会社を立ち上げています。

「日本プロ野球選手会」のことを教えていただきましたが、その選手会が昨年2024年から立ち上げたプロジェクトが「ファントモ」ですね。GAIAもささやかながら協賛をさせていただきました。この「ファントモ」始動のきっかけを教えてください。

「ファントモ」を始めたきっかけは、ストライキから20年経つタイミングで、“もう一度ファンと一緒に野球界を考える場を作りたい”という想いがかねてからあったからです。特にアメリカのメジャーリーグではファンアンケートを取って、ルール改正や制度に反映するという

流れがあります。

でも日本ではそういった“ファンの声を聞く仕組み”がありませんでしたので、そのためのプラットフォームがあったらいいなとずっと思っていました。ストライキではファンの声が大きな後押しになりましたから。

「ファントモ」を通じて解決していきたい課題や目指す姿について教えてください。

一言でいえば“ファンと一緒に野球界を変える取り組み”をしていきたいと思っています。

例えばDH制（Designated Hitterの略で、投手の代わりに打席に立つ打者を指名するルール）やピッチクロック（投手が打者に投球するまでの時間を制限するルール）の導入など、ファンの意見が反映されないまま議論されることが多いのが現状です。そうではなく、選手とファンと一緒に野球界の未来を考える場が必要だと考えています。

また、選手会として大きな課題だと捉えており、「ファントモ」を通じて解決していきたい問題の一つが選手の“セカンドキャリア”についてです。引退後の生活・仕事の準備が十分ではなく、日本では球団が選手を解雇したらそれで終わり、というのが現状です。選手の方も、何でもいい

から仕事を紹介してくれと言ってきたり、焦って就職しても2ヶ月で辞めてしまったというようなこともあります。プロアスリートから急に切り替えてビジネスの現場に出なくてはいけないというのは非常に難しいことなんです。

一方、海外のリーグでは、セカンドキャリアのサポートにしっかりと投資しています。それが結果的に野球普及にもつながっていると理解しているので、選手会としても2019年に“ビジョン”を掲げ、（1）「野球普及・育成環境の整備」（2）「魅力あるプロ野球の構築」（3）「引退後の充実」を3つの柱に、魅力ある野球界のための好循環を目指しています。

高校卒業後にプロ野球界に入って、平均どれくらいプロとして活躍するのでしょうか？

今は長く続ける人も増えたのですが、早く見切りを付けられる人もいますので、昔からずっと9年というのが平均です。親御さんが子供に野球をやらせるにしても、その後のキャリアがしっかりしていれば、積極的に野球選手になりたいという夢を応援できますよね。

メジャーリーグだと、引退してから医者や弁護士になる選手もいます。今、選手会では引退選手100人以上に個別に連絡を取って、やりたいことや希望をヒアリングして

います。キャリア顧問と面談を実施し、大学と連携した進学支援も進めています。たとえば國學院大学には、今年で5人目の元選手が入学します。入学金と年間学費相当額の奨学金を給付する制度があり、大変ありがたいです。また新潟産業大学の通信教育課程である「ネットの大学managara」にも元選手が同様の制度を活用して進学しています。仕事をしながら学べるので、球団職員として働きながら学んでいる選手もいます。

引退してすぐというのは、知識もないし、ビジネスのことも分からない。野球一筋でやってきたわけですから、プロのアスリートというのは、大概そんなものです。

ですから「ファントモ」で原資を確保できれば、引退後3ヶ月間、午前中は給与を出して幼稚園などを回ってもらい、午後はキャリアプログラムを受けてもらう、といった取り組みが可能になります。賢い選手は、今でも1年だけと決めて球団職員として働き、その間に企業訪問やOB訪

間をしてグローバルIT企業に入ったような方もいます。

選手はみんな“努力する能力”があるのですが、野球一筋でやってきたので、やりたいことを見つけるのがなかなか難しいんです。集中できる場所を見つける手伝いをしてあげることが大切です。残念なことなのですが、選手が現役中にセカンドキャリアに向けた活動をしていると、「そんな暇があったら練習しろ」なんて言われることもあるんですよ。そういう風習も変えていかなくてはいいですね。

今の時代は人手不足ですから、社員を大切に作る時代になりましたが、球団というのは狭き門で入りたい子がいっぱい来ますから、世間一般とは感覚が違うのかもしれないですね。GAIAはこの度「ファントモ」に協賛させていただきましたが、選手の金融教育といった側面では、特に一緒に取り組みをさせていただけることもありそうですね。

GAIAさんのような企業の協力も、セカンドキャリアの一環としてすごく期待しています。選手たちにとって、お金の相談や投資の知識は本当に重要です。選手会では、選手専用のアプリを活用しています。まだ構築中のコンテンツもありますが、選手会のスタッフや弁護士にすぐ連絡できたり、メンタルヘルスの専門家とつながれる

仕組みなどを用意しています。将来的には、ファイナンシャル・プランナーともつながれるような体制を整えたいと考えています。目指しているのは“選手が困ったときにすぐ相談できる人がいること”です。僕ら選手会の人間ではアドバイスできない専門分野のことを、中立的な立場で適切な専門家とつなげることをしたいんです。

投資詐欺に遭わないための情報提供なども、お力になれそうです。

選手の中には、怪しい投資話に巻き込まれてしまうケースもあります。「10%の利回りですよ」なんて話に飛びついてしまうこともあるので、金融リテラシーを高めることはすごく重要です。以前、ある証券会社さんと一緒に“お金とホームラン”を絡めた面白い勉強会を実施しました。たとえば「利率10%

確定の運用商品は年間ホームラン500本打つと同じぐらいありえない話」みたいな例えで説明するんです。ああいうのが選手には響きやすいですね。また、海外では、PDM（プレーヤーズ・デベロップメント・マネージャー）制度というのがあり、日本でも広げていきたいと思っています。

PDM（プレーヤーズ・デベロップメント・マネージャー）制度というのは初めて聞きました。

海外、特にオーストラリアやニュージーランドでは、PDMが職業として当たり前のように存在しています。

PDMは、選手の金融・キャリア・メンタルヘルスなどを総合的にサポートする役割を担っており、クラブチーム単位で1〜2人常駐しています。日本ではまだ導入されていませんが、選手会の常勤スタッフとして配置できるようにしたいんです。実際にPDMという人にお会いしてみると、“寮のおじちゃん・おばちゃん”的な雰囲気を持つ人が多いですよ。海外だと、選手会の人間としてクラブチーム

に一部屋を持っています。選手はそこに自由に行くことができ、いろいろな悩みを相談できます。メンタルの専門家、金融の専門家、それぞれがPDMのバックについて、PDMをハブにしてより深い相談に対応できる体制が作られています。

実は、日本のラグビー選手会ではすでに動き始めていますし、益子直美さんや大山加奈さんといったバレーボール界の方々もPDMとして活動されており、アスリート支援の形が徐々に整備されつつあります。

色々とお伺いしましたが、野球の未来についてもお聞きしたいと思います。少子化でもあり、子供が選ぶスポーツも多様化していますが、その中で大谷選手の活躍は野球界にとっては大きいですね。

今、日本は少子化が進み、子供がスポーツとして野球を選ぶハードルも上がっています。サッカーやバスケットなど多様な選択肢がある中で、野球は親の負担（当番制や用具代）が大きいという点も課題です。一人親家庭では週末のサポートができないことも多く、チームに入りづらい構造になってしまっています。そういった中で、僕らもキャッチボール教室などの草の根の普及活動をやっている訳ですが、特に大谷翔平

選手やWBCの影響で、野球を始める子は増えているという声も地方で聞きます。ただ“続けられるかどうか”はまた別の問題で、そのためには野球界全体が努力していく必要があると感じています。また、男子だけではなく女子野球も世界大会で7連覇していて、非常に強いんですよ。ただあまり報道されていないのが現実で、ソフトボールの方が有名ですよ。ここもっと盛り上げていきたい分野です。

GAIAのお客様が「ファントモ」を支援したい場合にはどうしたら良いでしょうか？

「ファントモ」では、寄付を通じて活動を支援いただける制度を整えました。年会費6,000円（500円×12か月）での支援が可能です。1年間の支援に対して、オリジナルタオルと

ピンバッジをお渡ししています。ピンバッジは年度ごとにデザインを変えていく予定です。複数口での支援も受け付けていますので、例えば10口だと6万円になります。

寄付の特典として、交流の機会などはあるのでしょうか？

「ファントモ」の活動の一環として、年に6回「ファントモミーティング」というオンラインイベントを開催していく予定です。第1回、第2回はすでに実施済みで、第3回は6月下旬を予定しています。

基本的にはウェビナー形式でこちらから一方的にお話するスタイルですが、今後はファンからの意見を吸い上げるような仕組みにしていきたいと考えています。

これから色々企画されていくところですね。

はい、例えばトライアウト観覧の優先席を用意したり、選手会主催イベントでの特典なども構想に入っています。

特にトライアウトは、選手にとって再出発の舞台でもあり、そこを応援する形での関与は“特別感”のある体験になりますね。“一緒にイベントを運営する”といった経験だったら、非常に嬉しいだろうと思います。イベントの受付を手伝ってもらうような形でも、参加した人には深い満足感が残ると思います。最後にGAIAのお客様へメッセージをお願いします。

GAIAさんの2世代・3世代のつながりという点は、まさに選手会の理念とも共通しています。

今の選手のために制度を変えていく事も必要ですが、例えば2004年のストライキも、ストライキをやった選手が恩恵を受けているのではなく、今の選手、未来の選手が恩恵を受けています。もし8球団になってしまったら、

プロになれていない選手もいた訳ですから。そういった意味で、現役の制度整備だけではなく、未来の選手たちのために“良い野球環境をつくる”ことが、私たちのミッションだと思っていますので、ぜひ活動を見守っていただければ嬉しいです。

本日は、貴重なお話をありがとうございました。これからの活動も注目しています。

新しい野球のミライを共に描いていく。



▼ 野球界のさまざまな課題を解決するプロジェクト

「ファントモ」公式サイト

<https://jpbpa.net/fantomo/>



インタビューを終えて

桜が満開の四月上旬、中桐、F.P.中澤、マーケティング部（永井・船井・下山）の五名で、日本橋にある日本プロ野球選手会のオフィスにお邪魔し、森事務局長にお話を伺いました。森さんは阪神で活躍した元プロ野球選手とあって、がっしりとした高身長のお姿に最初は緊張しました。次世代を見据えた熱い想いと共に、球界にまつわる様々な課題やその背景も分かりやすく教えていただきました。

後日、あるお客様にインタビューの内容をお伝えしましたら、こちらの小説を手渡していただきました。ここで少しだけご紹介を：

「アルプス席の母―早見和真著」（小学館）

甲子園を目指す球児をもつシングルマザーの目を通して描かれた野球小説で、今年（2025年）の本屋大賞二位に選ばれました。高校球児を支える父母の負担の大きさ、人間関係の複雑さ、監督との緊張感のある関係性などの知られざる現状が描かれており、森さんがお話されていた一人親家庭で球児を支える困難さがよく分かります。小説としては、怪我や挫折に向き合いながら大きく成長する息子に向き合う母親の喜びや不安、一抹の寂しさが描かれており、家族の物語としても胸を打たれます。読後は高校野球を甲子園で観戦した後のような爽快感と感動に満たされ、ぜひ皆さまにお薦めしたい一冊です。

おまけですが、日本橋はGAIA創業の地です。道中、中桐に連れられて創業時のマンションに立ち寄りました。インターフォンを押して入る本場に、普通のマンションで、この時代にスリッパを履いて面談をし、ご契約くださったお客様の勇氣（英断!）に感心する我々社員でした。

（クライアントリレーション 永井）